

領域別評価のまとめ【 第2章～第5章 】（水色の「領域のまとめ」欄に入力して下さい）	
第2章 ねらい及び内容並びに配慮事項	
第1節（前文のため省略）	
第2節 乳児期の園児の保育 平均 4.2	
1 健やかに伸び伸びと育つ(身体的発達)	
4.40	一人一人の発達や生活リズムを把握し、園児の気持ちに寄り添った保育を目指しているが、人員配置が難しい場面もあり、十分に寄り添えない時がある。園児たちが安心して、遊んだり、食べたり、眠ったりするための環境構成と人員配置の工夫がもう少し必要だと感じた。
2 身近な人と気持ちが通じ合う(社会的発達)	
4.40	愛着関係がしっかりと出来ており園児が安心して過ごせていると感じている。園児への言葉掛けは、日常の言葉遣いや会話のやり取りが出てしまうので、大人同士の言葉のやり取りも丁寧に行う様に心掛けたい。また、園児が安心して自己発揮できるように、前向きな言葉かけが出来るようにしたい。
3 身近なものに関わり感性が育つ(精神的発達)	
4.00	優しく短い言葉で、ゆったりとかかわっている。自分で選んで、遊べる環境にしているが、玩具一つ一つが、発達段階にあるものか、落ち着いて遊びに気持ちを注ぐことの出来る環境なのかを、都度確認していく必要がある。
2章2節 領域の まとめ	園児一人一人に向き合い、愛着関係がしっかりと出来ていると感じる。これからも、園児たちが安心して、遊んだり、食べたり、眠ったりする環境作りや安心して遊べる玩具や発達を促すための様々な形や感触のものとはどのような物か等、職員全員で考えていきたい。優しくゆったり、ひとりひとりの気持ちに寄り添う保育を目指し、職員配置の工夫もしていきたい。

第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育 平均 4.09	
1 健康	
4.14	「食べる」「遊ぶ」「眠る」を基本に、清潔で健康な毎日が送れるよう努力している。園児一人一人の気持ちに寄り添い、無理強いすることなく、出来る所を見守ったり、「一人で出来た」と感じられるようにさり気なく援助したりしている。園庭や散歩に出掛ける度、階段の昇降をしているが、2階の芝生広場にも「走る」「跳ぶ」「押す」「引っ張る」などの様々な体の動きを誘発するような環境づくりがあるとよい。どのような遊具や玩具を用意すればよいか、これからの課題である
2 人間関係	
4.17	保育者が園児の気持ちに寄り添うことで、心が安定し、安心して遊ぶ姿がある。また、毎日一緒に生活をしている仲間として、園児同士が認め合っていると感じる。同じ園庭で遊ぶ事で、以上児との交流も見られるが遠慮がちでもある。保育者同士がクラスの枠を超え、関わりながら、お互いを支え合う関係づくりをしていきたい。
3 環境	
3.50	豊かな遊びが展開されるように探求するための時間や空間を確保できているか、保育者自身が人や物に対して、愛着を持って関わっているか、職員全員で確認したい。また、五感を通して学ぶこの時期に、形、色、大きさ、量、重さなどを感じられる様々な物や体験を準備しておきたい。身近な生き物に関しては、虫や近所の亀、犬などと触れ合う事はあるが、命をもつものの存在をもう少し感じてほしいので、どのような環境にすればよいか考えていきたい。
4 言葉	
4.29	保育者が、園児が何か伝えようとしている時に、温かなまなざしで園児と視線を合わせて聞こうとする姿がある。園児の気持ちを言語化してあげる際には、豊かな表現や語彙で表現できるようにしたい。また、ごっこ遊びなどの遊びや絵本などに触れながら豊かな言葉を獲得していけるようにしたい。
5 表現	

4.33	園児の表現は、生活の様々な場面で見られる。それらを受け止め、その世界と一緒に楽しみながら、イメージがさらに広がるように関わっている。十分に表現できるように、時間や空間が約束されているかが課題である
2章3節 領域の まとめ	「食べる」「遊ぶ」「眠る」を基本に、清潔で健康な毎日が送れるよう努力している。園児一人一人の気持ちに寄り添い、無理強いすることなく、出来る所を見守ったり、「一人で出来た」と感じられるようにさり気なく援助したりしている。穏やかな雰囲気の中で、園児が安心して自分の気持ちを表現し、そしてそのままを受け止めている。五感を通して学ぶ時期に、様々な物や体験を十分に用意出来ているかが今後の課題である。

第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育		平均 3.75
1 健康		
3.50	園児の思いを丁寧に聞き、共感しありのままを受け止め、安定した信頼関係を築いている。また、一人ひとりの健康状態を把握し、体調の変化にいち早く気付けるよう心掛けている。園児の危機管理能力を育てるために小さな怪我は必要だが、安心して遊べる環境作り、園児自身が気付けるような声掛けなど、保育者が意識しておくことも大切である。園庭が狭いので、その中で体を思い切り使って遊べる環境作りも課題である。	
2 人間関係		
3.85	園児一人一人の思いや考えを尊重しながら、園児同士が関わり合うことができるように援助している。善悪だけで判断するのではなく個性や考えの違いであることを園児が感じられるよう保育者自身が意識をして、一人ひとりそのままを受け入れるように努力している。	
3 環境		
3.50	自然への興味関心は高く、収穫体験や園内外でもきのみ拾いや虫などに触れる機会があった。伝統的な遊びや社会情勢について園児に投げかける機会が少なかったと思うので、これから意識していきたい。また、園内の教具や道具の配置、園児の生活の導線を考えた物の配置など工夫すべき課題も見えてきたので、しょくいんで話し合い改善していく必要がある。	
4 言葉		
4.00	体験を重視した保育の中で、感情やイメージを表現する術として、言葉で伝えることの大切さは自然に身につけてきていると感じる。言葉が豊かになっている一方で、間違った使い方をしている園児対しても根気よく丁寧に対応していると思う。保育者自身が豊かな言葉を発せられるよう、心と体の余裕を持ちたい。	
5 表現		
4.00	園児が安心して表現できる雰囲気づくりを心掛け、表現することの喜びや達成感を味わえるようにしている。これからも、園児のイメージしているものを理解し、そのイメージを十分に表現できるよう、道具や用具、素材を用意し園児と一緒に環境を構成していきたい。	
2章4節 領域の まとめ	園児一人一人に寄り添い、気持ちに共感したり安心して言葉を発したりできるような関係づくりを目指している。作ったり描いたりする環境は出来ているが、体を思いきり動かしたり自然に外へ行こうと思えるような環境作りがまだ不足していると感じる。また、地域や高齢者との関わりも増やしていきたい。	

第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項		平均 4.12
1 満3歳児未満の園児の保育の実施における配慮事項		
(1) 乳児期の園児の保育に関する配慮事項		
4.17	満3歳未満の保育は、より丁寧に、園児にも保護者にも向き合うことが大切である。栄養士や看護師の専門性を活かした保育は出来ているので、さらに職員一人一人が保育のプロフェッショナルとして、科学的根拠を含め、園の方針などを学び直し、専門性を活かした保育や保護者支援ができると良い。	
(2) 満1歳以上満3歳未満の園児の保育に関する配慮事項		

4.00	園児一人一人を大切に思い、主体性を尊重している。この時期の発達の差は大きいので、それぞれの成長段階に寄り添った保育が必要である。安心安全な環境構成、余裕を持って見守れる職員配置が喫緊の課題である。
2 幼保連携型認定こども園における教育及び保育の全般における配慮事項	
4.17	時代が変化し、価値観が多様化している今、保育者も新しい知識、考え方を学び直す必要があると感じる。また、園児との信頼関係を築き、その安心感から自ら積極的に環境に関わっていく園児の姿を認め、励ます保育者で有りたいと思う。性差の問題についてはまだ「男のk」「女の子」と分ける言葉を使ったり、「ちゃん」「くん」付けで読んでいたりするので、注意していきたい。
2章5節 領域の まとめ	満3歳未満の保育は、より丁寧に、園児にも保護者にも向き合うことが大切である。栄養士や看護師の専門性を活かした保育は出来ているので、さらに職員一人一人が保育のプロフェッショナルとして、科学的根拠を含め、園の方針などを学び直し、専門性を活かした保育や保護者支援ができると良い。また、時代が変化し価値観が多様化している今、保育者も自らを振り返り、様々な文化や性差を受け入れる柔軟性を持つことが大切である。

第3章 健康及び安全		平均 4.13
第1節 (前文のため省略)		
第2節 健康支援		
4.11	園児の健康状態や発達の状態については、看護師を中心に、常に把握できるようにしている。 感染症、アレルギー、怪我や事故などの対応マニュアルはあるが、職員全員が共有し共通理解できているかは疑問である。 保護者との連携がしっかりと取れるようにしながらこれからも園児が健康に園生活を送れるようにしたい	
第3節 食育の推進		
3.83	市の献立を基に、地産地消の旬の食材を使用し、安全で美味しく食を楽しめる工夫をしている。 食育につながる経験は、園外や畑での栽培、収穫、調理体験などを通して行われている。給食参観を取り入れ保護者にも、給食の様子や味などを伝えている。保育計画の中の食育の位置づけを、職員が意識することが大切である。	
第4節 環境及び衛生管理並びに安全管理		
4.29	園生活の中で園児の安全確保、危機管理は最重要と言える。今の取り組みを続けていき、さらに職員一人一人の意識をより高めていくために、訓練や研修に参加し、不足に事態にも冷静に対応できるようにしておく	
第5節 災害への備え		
4.29	園内での訓練等は出来ているが、地域との連携に関しては不足している。園児や保育者が訓練慣れしないように、様々な状況を想定し訓練計画を立てることも考えている。	
3章 領域の まとめ	園児の健康状態や発達の状態については、看護師を中心に、常に把握できるようにしている。 感染症、アレルギー、怪我や事故などの対応マニュアルを職員全員が共有し共通理解できるようにしたい。園内での避難訓練等は出来ているので更に地域との連携を深めていき、災害時の避難を確実なものにしていきたい。	

第4章 子育ての支援		平均 4.06
第1節 (前文のため省略)		
第2節 子育ての支援全般に関わる事項		
4.25	子育て支援として、保護者の思いばかりに寄り添うと子どもが置き去りになる恐れがある。バランスよく支援できるようにしたい。また気になる子育てにくいと感じている保護者については、地域の関係機関との連携を深め、支援していきたい。	
第3節 幼保連携型認定こども園の園児の保護者に対する子育ての支援		

4.14	職員自身も支援の知識技術を高める努力をし、園児の幸せを一番に考えた対応を心掛け、専門機関と連携し支援を行っている。保護者が子育ての喜びやゆとりを感じられるような保育参加や参観などを計画実施しているが、働き方や家庭環境など多様化している中、それぞれに違った支援が必要である。保育者が各家庭の背景を把握し支援することの難しさがあるので、組織として動ける体制作りが大切である。
第4節 地域における子育て家庭の保護者等に対する支援	
3.75	一時預かり保育や未就園児教室など、園全体で地域との関わりを大切にし、子育て支援の中心的存在になるべく努めている。
4章 領域の まとめ	保護者が子育ての喜びやゆとりを感じられるよう保育参加や参観など立案実施している。多様化している家庭環境も鑑み各々にあった支援の必要性も感じている。保育者が一人で抱えるのではなく組織として取り組める体制づくりが大切である。一時預かりや未就園児など、園全体で地域との関わりを大切にし子育て支援の中心的役割を担っている。

第5章 職員の資質向上 平均 3.77	
1 職員の資質向上に関する基本的事項	
4.00	自己評価を行うことで、個々の課題点や長所を確認している。その上で、保育の内容の改善や保育者の役割分担の見直しなどに取り組み、保育の質の向上に努めている。専門性を高めるために必要な知識技能の習得、維持及び向上にも日々努めている。
2 施設長の責務	
3.00	園児一人一人に向き合い、丁寧で温かな保育を行うには、職員の心と体に余裕がなければならない。行事に追われ日々の事務処理、保護者対応に追われることのないよう、全体的な計画の見直しをしていく。また、施設長として、園を取り巻く社会情勢を踏まえつつ、専門性等の向上に努めていき、自らが職員の見本となるべく、人間性も磨いていきたい。
3 職員の研修等	
4.00	園内研修、市や県主催の研修、専門機関の研修などに参加し、職員の知識や技術の向上に努めている。職員同士も励まし合い刺激し合うことにより、保育の質も高まり園全体が豊かな保育を行っていると感じる。しかし、園外の研修においては参加できる職員に限られるため、研修報告や実践発表などのアウトプットを行い、職員みんなで共有していく場作りをしていきたい。
4 研修の実施体制等	
4.00	職員同士が自ら学び合う組織にしていくために日々の保育の振り返りや語り合いの時間の確保、勤務時間内の会議、研修参加など工夫していきたい。また、働きがい、学び甲斐のある仕組み作りも必要だと感じている。 園内研修計画は、日時や具体的な内容までしっかりと立案し、実行していく。
5章 領域の まとめ	園児一人一人に向き合い、丁寧で温かな保育を展開していくためには保育者自身に余裕がなければならない。心と体に余裕が持てるよう園全体の計画の見直しや職員同士が学び合う組織にしていかなければならない。そのために園内外の研修に積極的に参加し、知識や技能を習得し職員自身や保育の質の向上に努めている。

2025 年度 幼保連携型認定こども園教育・保育要領に基づく自己評価

作成日

令和7年12月26日

法人名

園名

みやざき福祉学園

桜ヶ丘幼稚園

まとめ

全体平均

3.99

第2章第2節 乳児期の園児の保育	園児一人一人に向き合い、愛着関係がしっかりと出来ていると感じる。これからも、園児たちが安心して、遊んだり、食べたり、眠ったりする環境作りや安心して遊べる玩具や発達を促すための様々な形や感触のものはどのような物が等、職員全員で考えていきたい。優しくゆったり、ひとりひとりの気持ちに寄り添う保育を目指し、職員配置の工夫もしていきたい。
第2章第3節 満1歳以上満3歳未満の園児の保育	「食べる」「遊ぶ」「眠る」を基本に、清潔で健康な毎日が送れるよう努力している。園児一人一人の気持ちに寄り添い、無理強いすることなく、出来る所を見守ったり、「一人で出来た」と感じられるようにさり気なく援助したりしている。穏かな雰囲気の中で、園児が安心して自分の気持ちを表現し、そしてそのままを受け止めている。五感を通して学ぶ時期に、様々な物や体験を十分に用意出来ているかが今後の課題である。
第2章第4節 満3歳以上の園児の教育及び保育	園児一人一人に寄り添い、気持ちに共感したり安心して言葉を発したりできるような関係づくりを目指している。作ったり描いたりする環境は出来ているが、体を思いきり動かしたり自然に外へ行こうと思えるような環境作りがまだ不足していると感じる。また、地域や高齢者との関わりも増やしていきたい。
第2章第5節 教育及び保育の実践に関わる配慮事項	満3歳未満の保育は、より丁寧に、園児にも保護者にも向き合うことが大切である。栄養士や看護師の専門性を活かした保育は出来ているので、さらに職員一人一人が保育のプロフェッショナルとして、科学的根拠を含め、園の方針などを学び直し、専門性を活かした保育や保護者支援ができると良い。また、時代が変化し価値観が多様化している今、保育者も自らを振り返り、様々な文化や性差を受け入れる柔軟性を持つことが大切である。
第3章 健康及び安全	園児の健康状態や発達の状態については、看護師を中心に、常に把握できるようにしている。感染症、アレルギー、怪我や事故などの対応マニュアルを職員全員が共有し共通理解できるようにしたい。園内での避難訓練等は出来ているので更に地域との連携を深めていき、災害時の避難を確実なものにしていきたい。
第4章 子育ての支援	保護者が子育ての喜びやゆとりを感じられるよう保育参加や参観など立案実施している。多様化している家庭環境も鑑み各々にあった支援の必要性も感じている。保育者が一人で抱えるのではなく組織として取り組める体制づくりが大切である。一時預かりや未就園児など、園全体で地域との関わりを大切に子育て支援の中心的役割を担っている。
第5章 職員の資質向上	園児一人一人に向き合い、丁寧に温かな保育を展開していくためには保育者自身に余裕がなければならない。心と体に余裕が持てるよう園全体の計画の見直しや職員同士が学び合う組織にしていかなければならない。そのために園内外の研修に積極的に参加し、智識や技能を習得し職員自身や保育の質の向上に努めている。
総合	今回の自己評価を通じて、職員一人一人が園児の気持ちに寄り添い温かで丁寧な保育を目指していることがわかった。その中で「3歳以上児保育」と「職員の資質向上」の平均が低かったのも、「一人ひとりに向き合いたい時間が無い」「研修に参加したいが保育を抜けられない」という葛藤による厳しい自己評価の結果である。この結果を踏まえ、職員の心と体に余裕が持てるような全体的な計画の見直しと会議や研修参加が心置きなく出来る職員配置を考えるという課題が見えた。また、環境構成についても園庭の狭さや自然に触れる機会の乏しさなども課題として上がっていたので、職員全員で考えていきたい。

データ表

内容	項目数	平均
「乳児保育」	15	4.20
「3歳未満児保育」	32	4.09
「3歳以上児保育」	53	3.75
「教育保育の配慮事項」	16	4.13
「健康・安全」	29	4.14
「子育ての支援」	15	4.07
「職員の資質向上」	9	3.78
計	169	3.99

データグラフ

